

それは1本のねじから始まった 日東精工にも息づく、 近代発展のDNA



群馬県高崎市郊外にある曹洞宗「東善寺」に1本のねじが展示されています。一見、何の変哲もない古いねじですが、じつはこれ、日本近代化のシンボルともいえるもの。東善寺ゆかりの小栗上野介忠順が、今から150年以上も前にワシントン海軍造船所から「こういうものをどどんつくれる国にしたい」と持ち帰ったものです。小栗公のその思いを今、当社日東精工は受け継いで「形」にしています。

小栗上野介といっても、学校の教科書にも登場しないので一般の認知度は低いのですが、幕末に遣米使節団に目付として加わり、見聞しながら世界一周をして日本に帰ってきた人物です。

咸臨丸の勝海舟が有名ですが、咸臨丸はサンフランシスコまでの護衛の役割にすぎず（勝海舟は航海のほとんどを船酔いで寝て過ごしていたという話もあります!）、いずれにしろ日本からポウハタン号、そしてナイアガラ号などを乗り継いで、サンフランシスコだけでなく、ワシントン、ニューヨークそしてアフリカ喜望峰を周ってインド洋経由で帰ってきた小栗上野介のほうが、この視察については、本家本元、果たした役割は大きいのです。

ワシントン海軍造船所視察が 日本変革のきっかけになる

ワシントンの造船所を間近で見た小栗上野介はその「凄さ」に目を瞠ります。日本の技術、いってみれば国力が、欧米のそれにとつてい及ばないことを悟り、これを見倣い追いつき追い越すことを目指し、帰国後、横須賀製鉄所（造船所）着工に尽力します。

莫大な金をかけるよりも船を外国から買ったほうが安くつくという反対の声には、修理メンテナンスなどを考えれば自前技術を育てたほうが長い目で見れば安くつく、また、すでに徳川家が力を失いつつ

あった時代、幕府がそういったことに手をつけても先がどうなるかわからないといった声にも『幕府の運命に限りあるとも日本の運命に限りなし』と信念を曲げることはありませんでした。

日露戦争、対馬沖の日本海大海戦で日本が勝利した理由のひとつに、長い航海で船底やスクリューについた貝殻などで戦闘能力が半減していたバルチック艦隊に対し、帝国海軍は横須賀のドッグで十分なメンテナンスを終えて万全な状態で出港できたことが挙げられます。実際、東郷平八郎元帥は「日本海



上の写真はワシントン造船所を視察した小栗上野介（前列右から2人目）。下の写真は日本からアメリカに渡ったポウハタン号の模型。どちらも東善寺所蔵

次世代車両技術戦略「TNGA」にも関与、表彰された新しいクルマの流れに、当社も着実に対応しています。

トヨタ自動車では次世代車両技術「TNGA (Toyota New Global Architecture) 戦略」をすすめています。これは部品の共通化、標準（モジュール）化によって、あるいは複数の車種を同時に企画するグループ開発などによって、コストを大幅削減。このコストを、たとえばユーザーの嗜好や地域特性にかかわる部分に振り分けて差別化を図り「もっといいクルマ」を実現しようというもの。関連サプライヤーも含めた総力戦で、その効果を最大限に引き出していく“次世代に向けた設計改革”です。具体的な製品をここではご紹介できませんが、当社・日東精工もこの「TNGA」に参画しています。内装部品のサプライヤーがトヨタ自動車から「TNGA」に関する荣誉ある賞を受賞。これはこれまでの「多方面組付」を設計変更し「一方向組付」

にして、つくりやすく効率アップさせるプランが高く評価されたものです。そしてこの受賞内容に基づいた仕様で、当社産機事業部が内装部品の組付設備を受注し、設計・組立・納入をサポート。それまでの工程数を4分の1、加工コストを2分の1まで抑えることを実現しています。前号の「ニュースレター」でもご紹介しましたが、当社の技術や製品はクルマの部品などに既に多数採用されていますが、新しい流れにも着実に対応。自動車産業への注力を今後、ますます加速化させていく予定です。

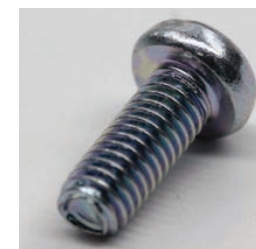


TNGAの第1弾は4代目プリウスの予定。画像はトヨタHPより

当社ゆるみ止めねじ「アプスロック」が国内メーカーの海外戦略に採用されました

この度、某国内メーカーのインドネシア向け二輪車の重要部品に、当社のゆるみ止めねじ「アプスロック」が採用されることになりました。

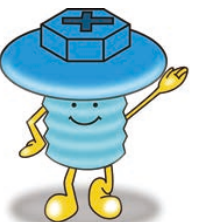
東南アジアモデルのハンドル部に採用されていますので、今後はインドネシアだけでなく他のアジアの国々、たとえば、インド、マレーシア、タイ、ベトナムなどへの展開も期待できるものです。これは当社ファスナー戦略販売課が中心になって動いてきた成果のひとつであり、四輪車だけでなく二輪車分野でも伸長、そしてグローバル化の加速を期待する一例です。



アプスロック
めねじの構成要素の中で比較的安定した（バラツキの少ない）フランク面へ特殊ねじ山形状を干渉させることにより、めねじ精度に影響を受け難く安定したゆるみ止め効果を発揮するゆるみ止めねじです

当社のねじキャラクター「ねじとくん」と命名しました！

ねじキャラクターのニックネームを募集したところ、全国紙、地方紙、業界紙をはじめ、WEBニュースなどで取り上げられ、またMBSラジオでアイドルグループ「私立恵比寿中学」が話題にしてくれたこともあり、1225通の応募がありました。厳正な審査の結果、愛称として「ねじとくん」を採用することにしました。名づけ親である春田様（京都府長岡京市）には謝礼（記念品）として京都府綾部市の特産品をお送りし、また応募者のなかから抽選で3名様にも特産品をプレゼントさせていただきました。審査結果の詳細は当社ホームページに掲載しています。



※なお、このキャラクターは外部のクリエイターの方にお問い合わせしたのではなく、当社日東精工へ研修にやってきたインドネシア現地法人社員のアイデアによるもので、社員一人ひとりを大事にする、そしていろいろな価値観を寛容しグローバルに展開する当社・日東精工を象徴するものです。

ての資材や部品を調達・加工する、必要な道具も自前で製造する、ありとあらゆる技術が集約した、いわば総合基地のようなものです。

そして多くの人間がかかわっていくうえでそれを統括するシステムづくりも必要で、陽が昇れば働いて沈めば休むというスタイルが当たり前だった時代に「定時出勤」「残業」といった概念を導入したり、技術継承やリーダーをつくるために「学校」をつくったりし、人づくりにも力を注ぎました。

「こういうものをどんどんつくれる国にしたい」と「ねじ」を持ち帰った小栗上野介。日東精工はその小栗上野介の想いを実際に「形」にしているのですが、つながりはそれだけではありません。当社では、ねじだけを製造販売するのではなく、ねじを製造する工具や金型、ねじ締め機やねじ締めロボット、あるいは組み立てラインまでをフォローしていますが、この事業は、横須賀造船所の「技術の結集・総合力」という点でもつながります。小栗上野介が仏語伝習所などの学校を開設したように、当社も民間工業教育機関として中堅技術者の養成を目的とした「綾部工業研修所」を設置して50年になります。

小栗上野介と「直接的」なご縁はありませんが、彼が描いた日本の近代化の設計図のうえで、当社、日東精工も発展し続けているといえるのです。

海戦で勝利したのは小栗さんのおかげ」と公言し、後に「仁義禮智信」という感謝の意を書き表し小栗上野介の孫に贈っています。小栗上野介の先見の明が、まさに証明されたものです。

横須賀製鉄所（造船所）が着工したのは慶応元年で、完成したのは明治2年です。しかし明治2年はいわばフル稼働になった年で、慶応年間からすでに運用は始まっていました。一般に近代化は明治からという印象を抱きがちですが、造船所のみならず鉄道、新聞、ホテルに株式会社……初めてビジョンを描いたのは小栗上野介でした。

つまり幕末、小栗上野介がアメリカから「ねじ」を持ち帰ったときから、日本の近代化は萌芽していたのです。

小栗上野介の思いを受け継ぐ日東精工

さて小栗上野介がワシントン海軍造船所、そして彼が着工をすすめた横須賀製鉄所（造船所）は、たとえば川の流れを利用して水車をまわし、粉をひくといったシンプルなものだけでなく、本格的な蒸気機関を原動力に用いたものでした。また単に部品を組み立てるだけの工場でもありません。船はすべてが鉄でできているわけではありません。ロープや帆も必要、建物には木材も必要、造船所はそういったすべ

東善寺と小栗上野介



徳川幕府からすべての役を辞し群馬県高崎市に隠遁する準備を進めていたが、西軍に処刑される。西軍（官軍）に歯向かわず戦わずして殺された唯一の幕臣。明治政府から逆賊逆臣

として扱われたために歴史の表舞台に登場しないが、近年その偉業が見直されつつある。東善寺には墓があり、関連資料展示もされている。村上泰賢住職著『小栗上野介 忘れられた悲劇の幕臣』（平凡社）あるいは東善寺ホームページ<http://tozenzi.cside.com/> などご参照。

横須賀製鉄所

最初「製鉄所」という名前がついたが、いわゆる溶鉱炉がある「鉄」そのものをつくる施設ではなく、その後造船所と名前変更。海軍工廠となり、戦後は一部米海軍の施設になっている。富岡製糸場がユネスコ世界遺産に認定されているが、富岡製糸場は横須賀製鉄所フランス人技士の協力を得て、また横須賀の技術や図面を応用してできたもので、横須賀製鉄所（造船所）の妹にあたる。なお、2015年は創設150周年にあたり、現在横須賀の記念艦「三笠」の展示室で「日本海海戦と横須賀製鉄所展」が開催されている。

「レジリエンス」とは 強くねばりのある「しなやかさ」

就活中の学生を対象に当社で「精密ねじプレセントキャンペーン」を実施していました。なかなか希望が通らない、自分の思いが伝わらず、心が折れそうになったとき「小さなねじでも必要とされている、必ず自分が輝ける場所がある」と励みにしてもらったもの。

このキャンペーンから「レジリエンス」という言葉を思い出しました。大胆に意識するなら「しなやかさ」ということでしょうか。

「しなやか」は古くは源氏物語にもみられる上品なさま。物理的に言えば、弾力性のある撓むさまです。先日、NHKのテレビ番組『クローズアップ現代』では「逆境に折れない心を育てる」というテーマとして「レジリエンス」を取り上げていました。仕事や人生で悩み、めげそうになったとき、鋼のように頑丈に跳ね返すという強さでなく、しなやかにこなし、いく強さ、一喜一憂せず思考の柔軟性

を育てようという内容です。うまくいかなかったとき、反省しそれを次に生かすことが大切です。しかし、マイナスの感情を引きずっている、次の取り組みにも負のシミュレーションをしてしまいがちです。体を動かすとか、食を見直すといった、目の前の「小さなできることの積み重ね」で、ネガティブマインドをポジティブに変革し、厳しい状況を乗り越えていくというものでした。

「レジリエンス」を多面的に受け止めましょう。頭が固くていいアイデアがでない、改善案が出せないなどと弱音をはかず、粘り強いしなやかな発想力、あるいは問題に応じて、多面的に対応できる体制づくりを育てましょう。

(経営コンサルタント 蒲田春樹)



『人生の「ねじ」を巻く77の教え』(ポプラ社)は当社オリジナル教則本を一般向けに再編集したものの書籍に掲載していないものや重複しても更新していくべきものを随時ここでご紹介していきます。



ねじのある街・あやべの魅力

新しい時代、室町幕府を開いた 足利尊氏は綾部で生まれたのです

室町幕府を開いた足利尊氏は、栃木県足利出身だと考える人も多いようですが、日東精工本社のある京都・綾部で生まれたという説もあるのです。

尊氏は父・貞氏の側室上杉清子から生まれたのですが、その清子は綾部の上杉荘(現在の安国町)出身。上杉家といえは越後の上杉謙信や米沢の上杉鷹山などがお馴染みですが、もともとはこの綾部にルーツを求めることができるのです。上杉清子は生家のある綾部に戻って尊氏を産んだといわれ、上杉家菩提寺だった綾部の安国寺には産湯用に水を汲んだ井戸が残っているほか、清子、尊氏、尊氏の妻の登子の墓があるのです。

安国寺はもともとは光福寺だったのですが、尊氏が後醍醐天皇を弔うために全国に造営させた安国寺の筆頭として位置づけられ、最盛時には16の塔頭、支院28を数えるほどでした。

紙面の関係もあり、ここで足利尊氏のことを丁寧に記すことはできませんが、新しい時代を切り開いた「初代將軍」がこの綾部の地とゆかりがあったことは間違いありません。

今月号のニュースレターの巻頭特集は、ねじが近代化のシンボルというテーマですが、「新しい時代を切り開く」「エポックメイキング」は、700年も前から綾部のDNAとしてあったのです。

景徳山安国寺。山門、鐘楼、仏堂などの堂宇が往時の繁栄を偲ぼせる。仏堂は珍しい瓦葺。釈迦如来や地藏観音菩薩など多くの重要文化財なども所蔵。©一般社団法人綾部市観光協会

